



第26回まちの駅全国大会 in はつかいち

「えっと賑わいつくろうやぁ!!」
～世界文化遺産「宮島」広島県廿日市市へようこそ～



【期日】2025 年 2 月 14 日(金)～15 日(土)

【場所】安芸グランドホテル

【主催】全国まちの駅連絡協議会 【主管】まちの駅ネットワークはつかいち協議会

【後援】総務省、観光庁、広島県、廿日市市 【協力】廿日市商工会議所、佐伯商工会、大野町商工会、宮島町商工会

式典・オープニング (12:30～13:00)

オープニング・アトラクション



歓迎和太鼓「烏神太鼓（うじんだいこ）」の演奏

会長挨拶

稲生 孝之(全国まちの駅連絡協議会会長)



みなさん、こんにちは。今年度会長を仰せつかりました稲生孝之と申します。全国各地から参加を賜りありがとうございます。

まちの駅は 1998 年の実証実験に始まり、各地の多くのキーパーソン同士が会って、2000 年に連絡協議会が発足しました。今年度は、「まちの駅再起動」をテーマに掲げて、まちの駅同士の交流と連携を推進しています。前会長からは「道の駅ではまちは変わらないが、まちの駅は地域を変える力がある」と教わりました。それは「まちの駅」がまちを愛する人、地域を大切に作る人のネットワークだからです。

コロナ禍で多くのものを失いました。まちの駅でも交流活動ができなくなりました。昨年度、4 年半振りに鹿児島で全国大会を開くことができました。その時に決まったことは、継続的に行うことになりました。

「駅」という出入り自由の場で、駅長や案内人のコーディネートによるコミュニケーションが、地域のファンづくりにつながります。まちの駅の特長である官民混成の全国ネットワークを活用した交流・連携活動の更なる促進を目指してきたいと考えます。まちの駅のサポーターを増やすべく、情報発信力を高めていきましょう。ど

うか地域自慢をお聞かせください。まちの駅のさまざまな可能性をこの大会で確認し、実現していきましょう。

最後に、大会をご準備いただいた「まちの駅ネットワークはつかいち」の方々にお礼を申し上げます。

歓迎挨拶

滝口 義明(まちの駅ネットワークはつかいち協議会会長)



みなさん、ようこそ廿日市へ。

昨年の鹿児島での全国大会では、県知事や県内の市町村長が多数参加され、ビックリしました。我々はそこまで出来ませんので、地域に根差した大会にしたいと考えました。ご参加ありがとうございます。

廿日市市は宮島を含む 5 市町村が 20 年前に合併したまちです。最初は 3 市町村が合併し、その後に大野町と宮島町と合併したという経緯があります。もし宮島市になっていれば、世界遺産の名称になっていたのですが…。

町役場が支所になるので、庁舎の 3000 坪の敷地を再整備することとなり、市と地域団体で協議して「道の駅」の整備案が採択されました。ところが、「道の駅」にするには 6000 坪の面積が必要になることが判明し、24 時間トイレは、市街地では住民の迷惑施設になりかねない。

そこで「まちの駅構想」が出てきました。さっそく本部事務局に鹿沼市のまちの駅を紹介していただき、「新・鹿沼宿」の視察を行い、鹿沼モデルを目標にスタートしました。まちの駅推進協議会を作って検討を重ね、3 年前にキーステーションの「まちの駅 ADOA」が完成しました。施設は市の補助金で整備し、建物の管理・運営は商工会が行っており、なんとか黒字経営を続けています。

60 駅でスタートしたまちの駅も一時は 100 駅を超え、鹿沼市を超える駅数になりましたが、今は 92 駅です。

みなさんには廿日市を知っていただき、大いに楽しんでいただきたい。どうぞよろしくお願い致します。

来賓挨拶 (動画メッセージ)

松本 太郎(廿日市市長)

地元市長として、まちの駅全国大会が廿日市で開かれること嬉しく思っています。まちの駅は地域の魅力を発信し、訪問者だけでなく地域住民の集う場所として、私たちの生活に欠かせない場所となっています。各地でまちの駅に取り組み、地域を元気にしているみなさんの情熱と努力に敬意を表します。

「観光とまちづくりトークセッション」では地元の取り組みの紹介、「分科会」では、4つのテーマでまちの駅によるまちづくりが議論されると承知しています。実り多い議論を期待しています。

廿日市市は、世界遺産宮島があり、観光と共に成長しているまちです。私たちもより良いまちになるように取り組んでいく所存です。

大会の成功と皆様のご健勝をご祈念しまして、挨拶とさせていただきます。本日はありがとうございます。



事務局報告

橋本 正法(全国まちの駅連絡協議会事務局長)

資料集の中から報告をさせていただきます。まちの駅は「道の駅」の民間版でもあります、「道の駅」が最初に提案されたのが、広島で開催された「地域づくりシンポジウム」でした。その後、日本トイレ協会の協力も得て「道の駅社会実験」を実施しました。それに参加した浅井佐知子さんが、本大会に参加されています。

現時点で青森や沖縄など「まちの駅」のない県もありますが、駅同士でつながる全国ネットワークであり、各地に仲間がいると考えると、夢が広がると思います。

「健康の駅」は健康をテーマにしたまちの駅です。本日は健康の駅推進機構の原口義座会長も参加しており、第3分科会で一緒に議論させていただきます。

国の動きでは、国土交通省が「二地域居住促進法」を施行し、地域への人の流れの創出・拡大の手段として、二地域居住の促進を進める方針を打ち出しています。まちの駅にも関わるテーマなので注目しています。

鹿児島大会の分科会で議論した「駅長会議の持ち方・活かし方」について、振り返りアンケートの結果も配布していますので、議論のご参考にしてください。

観光とまちづくりトークセッション (13:00~14:00)

テーマ『まちを元気づけるには・・・』

コーディネーター

岡千恵／倉本良一(FM はつかいち 76.1MHz)

佐藤 緑(株)ハーストリープラス 代表取締役)

廿日市市ひと・まち・しごと創生総合戦略推進会議委員

廿日市市出身で、広島市で女性の人生にプラスの提案をする女性ばかりの会社を運営している。企画部門と飲食部門があり、女性の視点でマーケティングやブランド開発を事業としている。

一昨年、宮島口のプロログという趣旨で、JR 宮島口駅前にカフェ「prolu」を開店した。ドリンクバーのほか、セミナーやワークショップを開催している。海外客の道案内の場所にもなっている。宮島口は栈橋で船に乗るまでの滞在時間は15分。滞在時間を伸ばそうと、10年前に築110年の蔵を使って「みやじまぐちの思い出shop epilo」をオープンした。帰りに寄ってもらおうエピログという趣旨で古本図書館を併設、行きに寄って本を借りて、帰りに返してもらう仕掛けで、2度立ち寄れる店にした。

イベントでは、一過性で終わらせず何ができるかを考えている。2017年から宮島口でマルシェを年5回くらい開催している。栈橋タイム、古物の市を年2回、朝5時から開催している。午前中で終わるので、市のある日は朝食を提供する店を用意した。お盆過ぎに開催するナイトマルシェでは出店を12店舗に限定し、その後に飲み屋のはしご酒をするイベントにして、5000円のメニューを用意している。

「宮島口商店街そぞろ歩き」というパンフレットを作成し、店舗紹介や見どころ紹介し、スタンプラリーを実施している。宮島口から宮島が見える景色も観光資源にして、煙突、牡蠣筏、牡蠣打ちの場所を紹介している。



女性視点で、女性が来やすいまちづくりを考えている。食事もオーガニックで体に優しいものを取り揃えている。女性の口込みで親子や家族連れが来るようになる。

いきなりクイズコーナー



倉本) 上海でも旭川市でも、もみじ饅頭が作られているそうです。この世の中にあるもみじ饅頭の種類は何種類でしょうか？

A：正解は 347 種類。

神崎 宏(㈲旅館かんざき 代表取締役) 新宮島観光旅館組合組合長

宮浜温泉はここから 6km くらいに位置する宮島から一番近い温泉郷で、10 数件の旅館・ホテルがある。

宮浜温泉の開湯 60 年を記念して、20m のヒマラヤスギに 12000 個の電球を点けるイルミネーションを始めた。毎日点灯式を実施しており、みんなでカウントダウンをして、宿泊者の中から記念日のある人を選出して、点灯スイッチを押してもらっている。

昨夏が 24 回目となった「宮浜温泉まつり」は、ステージを用意して、神楽、ヤマタノオロチの演舞、鳥神太鼓や地元メンバーの音楽などで楽しんでもらう。

「まくら投げ世界選手権大会」は、草津温泉で始まったイベントを引き継いだもので、畳の上で浴衣を着て投げるというルールを守りながら、まくら投げを競う。年々人気が高まっており、去年から 2 レーンに増やして実施している。倉本さんの実況で盛り上がっている。

「宮浜アドベンチャーズ」は、宮浜温泉を起点として海の体験や山の体験を楽しむアクティビティであるが、船で回る「宮島七浦巡り」は人気が高い。宮島のまわりに神社が 7 つあり、船で回って参拝する。2023 年度にアトラクティブジャパン大賞を受賞した。観光客があまり行かない宮島の裏側を船やヨットで回ったり、山を登るイベントを実施している。

今若 明(㈱地域事業再生パートナーズ 代表取締役) 総務省地域力創造アドバイザー

18 年前に県外から廿日市にきた。まちづくり会社を設立して、11 年間社長を務めた。

津田商店街は、山口県と島根県との境の旧佐伯町にある。商店街の危機を感じた会長から相談を受けたので、「まずは動きましょう」と提案した。まちに最も多く人

が集まる日を聞いたら、佐北駅伝には 900~1000 人の人が集まるというので、その日を実行日に決めた。また、繁盛店が 2 店(津保美堂製菓・藤井精肉店)あるというので、その店の近くを会場に、駅伝選手をみんなで応援しながら「ふれあいマルシェ」を行うことにした。

イベントのねらいは「テストマーケティング」。来訪者に「この商店街に何があればうれしいか」というアンケートを行い、170 人の声を聞いて、「カフェ」「パン屋」「デザイナー」を欲しがっていることが判明した。この 3 つを誘致しようという足掛かりをつかんだ。

準備段階として、2018 年から毎月 1 回、1 時間で終わる円卓会議「津田商店街を創る会」を定例化した。出入り自由で、趣旨に賛同する人であれば、子供でも地域外でも誰でも OK。欠かさず行うことで参加人数が増えて、学校長や自治会長なども参加するようになり、行けば誰かとつながる「縁づくり」の会議体になっている。

空き店舗対策では「津田ココから塾」を開き、プレーヤーの発掘を試みた。我々が頼んでも見せてもらえないので、地元年配者(レジェンド)に電話してもらい、6 店舗の空き店舗マップを作成し、空き店舗ツアー実施した。不要品がたくさん出てきたので、蚤の市を開催した。

金澤萌さんと黒木真由が、閉店した「ナガタストア(ナガスタ)」を使ったアップサイクルのコミュニティ拠点づくりを提案し、事業計画を立てた。不用品を捨てずに地元の人々が手を加え、商品として販売するというもので、地域ぐるみの活動になり、「第 27 回ひろしまベンチャー助成金」でエコ特別賞を受賞した。

その後も 1 年間に 1 店舗を埋めるというミッションを課して「津田商店街ココから 2 DAYS」を実施し、「パン屋」「グローブ屋」「アメリカン雑貨店」が生まれた。

マルシェの特徴は「軒先を貸すこと」。店は貸せなくても、軒下に長机を置いて、1 日 500 円で軒先を貸していく中で、常設化の話になる。電気屋の前にコーヒー屋ができた。平日と土日に行うことで、客層の違いが分かる。

2000 人の中山間地域に光を見出している若い人が出てきている。潮目が変わりつつあると感じている。



観光とまちづくりトークセッション (13:00~14:00)

岡) 今後、まちの駅との連携は？

佐藤) 広島市に住んでいるとまちの駅を知らない人が多い。地域の人々の声を聞くと、暮らしに関わる情報を求めている、観光とは違う住民目線のアイデアが出てくる。ポップアップとしても、まちの駅はすごいコミュニケーションの場になるのではないかな。

神崎) まちの駅に入っているメンバーで話し合いをしているが、旅館組合内の話になってしまいがち。異業種のまちの駅との交流、連携で宮浜の情報発信力を高めたい。アナログ口コミやチラシの力を生かしたい。

今若) ナガスタもまちの駅なので、宮島口のまちの駅とつながることで可能性が広がるのではないかな。円卓会議の中からいろいろな意見が出てくる。そこから前に進むことが始まる。

岡) 最後に一言ずつどうぞ。

佐藤) まちの駅の活動と一緒にからめるには、利用者がどのようなことをイメージしてまちの駅に来るのかを聞きながら、アイデアを出し合う。円卓会議のような話し合いから新たな展開ができるのではないかな。

神崎) 旅館業ではあるが、宿泊目的の方だけでなく、いろいろな人が気軽に立ち寄れるようなまちの駅にしていきたい。

今若) 3つのつながりを強化すること。①観光とのつながり…発地型から着地型観光に移行している。②学校とのつながり…高校も大学も地域との係わりを求めている。③公民館・市民センターとのつながり…生涯学習で学んだことを実践する場が必要である。

分科会 (14:15~16:45)

第1分科会

AIの活用術

昨年度、DX・インターネット活用についての分科会を開催し、年間を通して Zoom で検討をしてきた。その成果をもとに、特にまちの駅で AI をどのように活用できるのかについて、意見交換を行った。

進行役：本原 幸夫（全国まちの駅連絡協議会事務局）

話題提供「まちの駅の AI 活用について」

パソコン太郎(まちの駅ネットワークかぬま)

- ・ AI の活用事例として、今日の大会プログラムと会場で撮影した写真4枚をベースに、ChatGPT に指示してブログを書かせたものを提示してある。AI が未来に起こり得ることを想定して文章を作成している。実際の写真も用いて情報が整理されることが分かると思う。
- ・ AI 研究は 1950 年代から始まっている。AI が処理できる基本データは「文字」「写真」「音声」「動画」の4種類。写真から文章を作ったり、文章から画像を生成したり、いろいろな応用が可能になっている。
- ・ AI 活用は検索と違うことを概念として覚えて欲しい。資料を作る場合など、これまでは Google 検索で情報を集めて作成していたが、ChatGPT では、指示を出すことで生成 AI が資料を作成してくれる。
- ・ まちの駅では交流の継続がカギとなる。オンラインツールを活用しながら関係を発展させていくことが求められる。インターネットの発展による変化を恐れず、

積極的に活用する姿勢が大切である。

グループ討議

C グループ報告：東久保 隆(鹿児島まちの駅連絡協議会)

- ・ 鹿児島のウェブ委員会の活動について紹介した。グループ内でのディスカッションでは、メンバーの名刺を活用し、新たなつながりを模索した。
- ・ 地域間の連携について話し合ったが、具体的な結論には至らなかった。継続的な交流が重要であり、Zoom 会議などを活用すれば新たな可能性が生まれるとの期待感を共有することができた。

B グループ報告：宮原 政志(まちの駅ネットワーク東金)

- ・ 参加者同士のプロフィール交換を通じ、それぞれの地域活動について議論した。福岡の古民家活用アイデアが紹介され、AI でビジュアル化するデモを試行した。
- ・ 物産販売や新商品開発の可能性について話が広がるが、具体的な取り組みには至らなかったが、さまざまな可能性を感じる議論ができた。

A グループ報告：山本 誠(まちの駅ネットワーク本庄)

- ・ 参加者の職業が多種多様で、当初は自己紹介や雑談に時間を費やしたが、全国のまちの駅がそれぞれ異なる特色を持つことを理解する上で有意義だった。
- ・ SNS やオンラインツールを活用し、



情報共有を続けることの重要性を認識することができた。継続的な交流が新たな発展につながるとの意見が出された。参加者同士の対話を通じ、関係を深めることが重要である。

第2分科会

観光地におけるまちの駅の役割

「宮島」は、日本三景・世界遺産の島として、コロナ後はインバウンドを含め多くの観光客が訪れている。「我がまち自慢」を観光の切り口として捉え、それぞれのまちの駅で何ができるのかについて検討した。

進行役: 神崎 宏(まちの駅ネットワークはつかいち)

話題提供「会津まちの駅の観光戦略」

稲生 孝之(会津まちの駅ネットワーク)

- ・会津地域は 17 市町村あり、人口は約 30 万人。まちの駅は 38 駅、兄貴分の「道の駅」が 15 駅で、それらを掲載した『まちの駅ガイドブック』を毎年発行している。「会津はひとつ」と言う合言葉で、広域連携・広域交流を進める上でまちの駅の仕組みを取り入れた。
- ・会津若松市の人口は 12 万人。観光都市なので、まちの駅の看板を上げている施設の大半が観光関係である。まちの駅の活動がコロナ禍で停滞していたり、高齢化が進んで、引退をするケースが出てきている。
- ・観光については、県や国に提案して補助事業を得ている。観光庁の採択を受けた「Snow Wonderland 会津」事業では、おもに台湾からの観光客を対象に、冬の観光コンテンツを作る提案をした。
- ・台湾では東北 6 県の冬のツアーが人気である。そこで、会津若松市内の「まちの駅ツアー」を企画した。普段の活動を台湾観光客用にアレンジしている。地域の方との交流のほか、赤べこ絵付け体験、夜のスナック体験、芸妓とお座敷遊び体験、酒蔵見学と試飲など。最初は言葉の問題で断られたが、翻訳アプリを使うことで引き受けてもらった。
- ・台湾からの教育旅行も誘致して増えている。いずれは台北市内にまちの駅を作りたいと考えている。

自由意見交換

- ・集客力のある観光の目玉から、近隣地域へどう客を誘導するかを検討していく。宿泊につなげるためには夜まで楽しめるコンテンツを作っていく必要がある。インバウンド対応は、



たどたどしい英語でも熱意を伝えることはできる。体験プログラムもポイントになる。

- ・まちの駅マップを作っているが、大川に来た人だけに案内している。集客の多い近隣の佐賀市や柳川市で大川のマップを配布すれば効果が高くなるのではないかな。
- ・コロナ禍でまちの駅同士のつながりが薄れてしまった。駅同士の関係の再構築をしないと観光戦略は難しい。
- ・高い値段設定をすると客側が期待する。富裕層対応のコンテンツを作れば、お金持ちが来るようになる。
- ・地域資源を使った観光ができないかを話し合った。ブランド化は個人では難しいので、農産物も含めて地域全体を売り込むこと。そのためには行政との連携を強化する。姉妹都市との交流でまちの駅ネットワークを活用するなどのアイデアも出された。

浅井 佐知子(日本トイレ協会／設計事務所ゴンドラ)

- ・トイレは観光振興の下支えにしかないが、トイレをないがしろにはいけないと思う。5つの商業施設で 1000 人にアンケートをしたところ、「トイレだけに来ている」という人が 3 割もいた。
 - ・広島県府中市では「観光トイレ」を整備し、マップも作っている。静岡県伊東市でも観光トイレを整備しており、トイレ巡りツアーも実施している。
- Q:トイレが汚されたり、壊されたりという問題にアドバイスを
- ・まちの駅も性善説に立った取組みだと思うが、トイレのメンテナンスが大変なことはよく分かる。トイレの提供をやめてしまうよりも、使い方のルールとマナーをどう知らせるかを考えていくべきではないか。

第3分科会

まちの駅のメリットを考える

まちの駅はヒューマン・ステーションであるとともに、さまざまなテーマを持つ施設の集合体でもある。異業種のコラボレーションによって、まちの駅の可能性を広げていくため、特に「メリットは何なのか?」について考えた。

進行役: 吉田 恵子(まちの駅ネットワークとちぎ)

話題提供「まちの駅のメリット講座」

今泉重敏(NPO 地域交流センター九州代表)

- ・地域にはいろいろな店や施設があるが、全体で横につながることはあまり見かけない。自分の店だけでなく、地域全体の賑わいを取り戻したい、何とかしたいという郷土愛を持った人々が手をつなぐことで、まちの駅ネットワークはできている。各地でまちの駅ネットワークが生まれて、全国ネットワークになった。

- ・駅長会議を毎月開催している地域もあれば、2 ヶ月に 1 回や年に数回の地域もある。いろいろな地域情報を交換し、共有することで信頼と協力関係ができていく。
- ・他のまちの駅を知らずにいることはもったいない。「知る」ことは「知ってもらう」ことでもある。交流することでまちの駅の「見えない線路」が単線から複線に、さらに複々線になり、便数（紹介し合う機会）が増えていく。やる気のあるまちの駅は線路をどんどん増やしている。
- ・観光振興、商店街活性化、拠点整備などのまちづくり事業でも行政はコミュニケーションの場をまちの駅に求めている。場づくり・人づくりが地域課題を解決する。熱い思いの人がいるから頼もうということになる。
- ・県立高校がまちの駅ネットワークに加盟している福岡県粕屋町では、店を作りたいという高校生たちが、まちの駅で仕入れや販売の勉強をして、文化祭で商いを体験している。地域が高校生の実学の場になり、まちの駅が次代を担う人材育成の場になっている。
- ・仕事をしながら登下校時に子どもたちの見守り活動を行う「ながら防犯」「ながら見守り」をしているまちの駅もある。19 年間犯罪が減っていたが、令和 3 年から犯罪件数が増えている。まちの駅が防犯に協力することも地域貢献のあり方の一つである。
- ・健康づくりのために握力計を置いているまちの駅もあれば、景観づくりのために店先を花で飾ったまちの駅や、道路のごみ拾いを行うまちの駅もある。いろいろなテーマがあり、どれを取り上げるかで活動が変わってくる。いずれも郷土愛から発した行動である。
- ・まちの駅を理解してもらうための一番いい方法は、まちの駅を訪問して元気のいい駅長と交流してもらうことだろう。ぜひ、駅長に会いに行ってもらいたい。

自由意見交換

- ・まちの駅 ADOA 大野に商品を納品している業者は販路が広がるというメリットがある。ADOA では、農産物以外は、まちの駅からのみ仕入れている。
- ・熱のある地域とない地域で全く違う。熱のある地域を訪ねて、自分のまちでどう活かせるかを考えて、実践すること。ダメでも次のチャレンジを試みられる。
- ・まちの駅には店ばかりでなく、寺や学校も入っている。寺はまちのオアシスとして、癒し機能を持っており、ストレス解消のための仲間がいる。多様な業種のまちの駅から、自分にはない力を借りることができる。

- ・商工会議所もまちの駅になっているが、会議所会員以外の方とのつながりがメリットである。ネットワークのメリットでは、まちの駅にチラシが置けるようにして、情報発信を協力し合っている。
- ・健康の駅は「健康」をテーマにしたまちの駅であり、病院、福祉施設、温泉施設などが加盟している。社会活動で健康になる「社会的処方」が注目されている。
- ・まちの駅は自由度が高いため、自分の発想で活動することがメリットになっていく。個人的にはまちの駅に関わったことで全国の元気な人と会って話げできた。まちの駅を訪問して、その地域を知ることでもできた。自分ならではのメリットを見つけて欲しい。



第 4 分科会

まちの駅ネットワークと官民一体のまちづくり

まちの駅は官民一体となって活動しており、他に類のないユニークな全国ネットワーク組織。役所・役場、公民館、商店や飲食店、高等学校や大学、神社やお寺など、多種多様な業種が活動している。まちの駅ネットワークをベースにした官民協働のまちづくりを検討した。

進行役：高橋 祥次（全国まちの駅連絡協議会）

話題提供「まちの駅の官民連携の取組み」

福田 義一（まちの駅ネットワークかぬま）

- ・市のど真ん中にあったスーパーマーケットが廃業になり、ホテルや駐車場などのアイデアもあったが、まちの駅のキーステーションを整備することになった。施設は鹿沼市が建てたが、経営は観光協会と JA とが連携して民間で行っている。観光協会のメンバーが事務局で、行政は運営に口を出さないようにしている。
- ・事前に個人のまちの駅を募集し、31 駅が認定された。合併して再募集したら 39 駅になった。現在は 98 駅。
- ・市の支援策は業務委託料のほか、年会費分を支援している。新規加盟時に必需品として、パンフレット用の木製ラック、幟旗、看板を支給している。財政面以外は、市のホームページの中で活動を PR している。
- ・「お誘いはしない」という約束ごとにし、募集はするが、自分から手を挙げた人だけがまちの駅に加入する。

渡辺 栄一（富士市まちの駅ネットワーク）

- ・最初は富士市行政からまちの駅の提案があり、2004 年 12 月、4 店舗が実験的にまちの駅を設置した、翌年 22

駅になり、2005 年に正式スタートした。現在 58 駅。

- ・新駅の募集は富士市が広報誌で行っている。応募者に対してまちの駅の役員が審査をし、合格すると 4 月から正規のまちの駅となる。市は日常の運営には関わらず、まちの駅メンバーが自主的に運営している。
- ・まちの駅の活動として、「日本一のだるまのまち」としての富士市の PR イベントを実施している。また、「浮世絵のまち」としても、新たなプロジェクトチームを作って歩み始めている。
- ・毎月「井戸端会議」と称した駅長会議を行い、富士市の「あるもの探し」をしている。地域の小さなことを探し出せば、様々なテーマが浮かび上がってくる。

森 健一郎(まちの駅ネットワークはつかいち)

- ・平成 17 年の市町村合併で大野町役場が支所になり、以前のにぎわいがなくなった。廿日市市がにぎわい創出プロジェクトの検討会議を立ち上げ、大野町商工会が提案した「道の駅構想」が採択された。ところが、交通量に応じた駐車場整備の要件を満たすことができず、断念した。その後、まちの駅があることを知って、鹿沼市の協力を得て、鹿沼方式をまねる形で「まちの駅構想」を計画した。
- ・「まちの駅 ADOA 大野」は令和 3 年 11 月に完成し、翌年 4 月にオープンした。建設費 2 億 5000 万円のうち約 2 億円を廿日市市が負担した。地域の賑わい施設なので、固定資産税も減免されている。市内の商



工会、商工会議所が出資して、運営会社を立ち上げた。きちんと利益を出せており、法人税等も納めている。

活動紹介・情報交換

- ・長岡市は土地柄か、協働して何かをやるのが少ないと感じている。行政からの補助金が削られる中で、まちの駅の数も減っている。設立の趣旨も薄まりつつあり、行政や観光協会とまちの駅との連携策が見出せていない状況である。
- ・民間有志でまちの駅を発足させて運営している。行政との連携はできていない。竹原市は広島県内で消滅可能性が最も高い自治体という発表があった。危機感を持って、消滅しないように取り組んでいきたい。
- ・中心市街地活性化事業で、小城市から「まちの駅」の提案が出されて始まった。市内のまちおこし団体が高齢化で活動が止まっているが、「自転車サイクリングツアー」などにまちの駅ネットワークが関わっている。お金だけでなく、イベント運営のノウハウなどでも市行政の応援が必要である。
- ・「健康ウォーキング」などのイベントで困るのがトイレ。トイレのあるなしでルートが限られてしまう。市（主催者）とまちの駅とで連携して取り組んでいる。
- ・東金市防災課とまちの駅の防災連携の話が出ている。自治会の加入率が下がっているので、防災課もまちの駅に期待している部分がある。
- ・市役所がまちの駅になっている事例は官民協働の基本になる。行政としては財政的支援以外でも PR などの応援ができる。そのためにも官民どうしのコミュニケーションが不可欠だ。

分科会報告・総括 (17:00~17:30)

第 1 分科会報告

パソコン太郎(まちの駅ネットワークかぬま)

- ・AI を活用して地域の商品やサービスの「点」を「線」に変えていき、持続可能な連携の実現を検討した。具体的には、地域の特産品を AI で分析し、新たな商品開発につなげる試み。AI の提案で廿日市と鹿沼市が「いちごもみじまんじゅう」の商品開発を行った。
- ・「今年の成果」を振り返り、来年の大会での新たな取り組みにつなげていきたい。
- ・AI はあくまでアイデアの出発点であり、最終的には人の手で実現することになる。デジタル技術を活用しながら地域の活性化を継続的に進めていく。

第 2 分科会報告

土濃塚 雅代(まちの駅ネットワーク東金)

- ・コロナ禍で停滞したまちの駅同士の横のつながりを回復し、それを基盤に観光振興を進める必要がある。
- ・トイレツーリズムの事例紹介もあったが、まちの駅のトイレも破損やいたずらが増えており、維持管理コストの負担が大きく、利用を制限したいケースも出てきた。持続可能な管理方法を検討する必要がある。
- ・まちの駅は民間として収益向上を目指しつつ、行政と協力し観光事業の成功を目指すのが重要。観光振興による人の流れを促進する一方で、オーバーツーリズムによる生活環境の悪化から住民を守ることも課題だ。

第3分科会報告

河井 達志(鹿児島まちの駅連絡協議会)

- ・現場の実状を話し合ったが、まちの駅の認知度が低く、経済的・人的課題が大きいことを再認識した。
- ・地域の課題を相談・解決する場として、まちの駅で店主や利用者が気軽に交流し、情報共有できる。子供たちも立ち寄れる地域コミュニティの場にもなる。
- ・まちの駅関係者で成果を共有し、活動を活性化させたい。収益を目的にするより地域のために自然体で取り組むことが重要だろう。参加者同士の交流が最大のメリットであり、明日からの活動の活力につながる。

第4分科会報告

渡辺 栄一(富士市まちの駅ネットワーク)

- ・富士市では2005年に市の依頼でまちの駅を開始したが、行政の関与を最小限にし、運営はネットワークが行う。
- ・行政の強みは「信頼性の高さ」、民間の強みは「自由度の高さ」である。両者の長所を活かしながら協力することで、柔軟かつ信頼性のある活動が可能になる。
- ・会員の拡大や会議への出席率の維持・向上が課題だが、小規模なグループから始めるのが有効である。
- ・「まちの駅」は待つのではなく、積極的に行動し、交流を深めることが重要である。

Instagramの取り組み報告

吉田 雄治(まちの駅 MANONOMA)

山田 裕貴(まちの駅 MANONOMA)

- ・SNSは「玄関」で、ホームページは「名刺」に例えられる。Instagramは視覚的に感情へ訴え、拡散力が高いSNSである。まちの駅の活動を全国へ発信するツールとして、テスト投稿を始めている。
- ・ホームページや予約サイトと連携し、観光促進にも活用できる。コンサルティングも無料で提供している。
- ・運用メンバーを募集しているので、興味のある方はQRコードで参加していただきたい。

総括と今後の活動方針／次回開催地紹介

橋本 正法(全国まちの駅連絡協議会事務局長)

- ・AI活用や全国大会などの「きっかけ」を生かすことと、新しい出会いや交流が生まれる機会を大切にしたい。
- ・廿日市市では、オーバーツーリズムに対する訪問税が導入された。他地域でも法定外税の議論が出ている。
- ・それぞれが自分なりのメリットを見つけ、周囲の力を上手に借りることが大切である。頼み上手になろう。
- ・2025年度は東京での開催を予定する。コロナ禍で影響を受けた状況の立て直しを図りたい。新たな方向性を見出す議論の場にしたいと思う。

キーステーション「まちの駅 ADOA 大野」視察

案内役：山本 千帆里 (FMはつかいち)



バス移動中に廿日市市の紹介



「まちの駅 ADOA 大野」の施設見学



地場農産物とまちの駅商品販売



牡蠣とお好み焼きの試食

情報交換会 (18:00～20:30)



開会



来賓挨拶 松本太郎 廿日市市長



けん玉パフォーマンス Ken G



ドレスリング「ありがとう・ありがとう」

エクスカーション：廿日市市の魅力と宮島の歴史を知っていただく (2月15日)

廿日市市の魅力ある産業を体験するコース



ベテラン観光ガイドによる世界遺産宮島を満喫するコース

